

「正しさ」は道具じゃない

(マタイ・二八～二五)

朝ドラ「あさが来た」の好調が止まらない。要因の一つは「もう一人の主人公」、眉山はつ(宮崎あおい)の存在である。しかし「あさ」のモデルの広岡浅子の姉、三井春は二〇代で早世している。それを知ってかNHKには「はつを死なせないで」の投書が殺到、結局脚本は変更されたという。視聴者の力を感じさせるエピソードである。

時にその宮崎あおいさんの出演しているCMがすごいのだ。広大な草原に宮崎さん以下多くの女性が並んで「へ争う人はー正しさを説くー、Nobody is right (中島みゆき)「Nobody is right)」と大合唱するのだ。確かに世界は今日もこうした「正しさ」が引き起こす争いの脅威に脅かされている。とはいえ「正しさ」を放棄することは人間には出来ない。そこにこの問題の難しさがある。

閑話休題。聖書はイエスの(養)父ヨセフを「正しい人」と紹介している。彼の正しさはどういう正しさだったのだろうか。

一、悩みを産む「正しさ」

婚約から結婚まで。それは喜ばしい待ち望みの時だ。しかし一つのニュースによってヨセフの希望は暗転する。マリヤが妊娠したと言うのだ。ユダヤの律法では婚約は単なる口約束以上の「契約」であり、その解消はどちらかが死ぬか、離婚によってのみ成されるものであり、婚約はほぼ結婚と同じ意味合いを持つていた。そのような状況下でマリヤは妊娠したのだ。聖書は誰がヨセフにそれを告げたかについては沈黙しているが、誰からであってもヨセフの受けた衝撃はさほど変わらなかったろう。

この事実を前に「正しい人」ヨセフはどうしただろう。もし彼がマリヤに裏切られた痛みと憎しみに満ちていたなら、彼はその「正しさ」を自己の感情を充足させる道具にも出来た筈だ。旧約聖書の原理的な解釈を押し通し、不貞の罪で告発することも出来たし、或いは不貞の理由を明らかにして彼女の人生を壊してしまう事も出来たろう。だが彼はそうしなかった。何故か。それは彼の「正しさ」の故であった。そう考えるとヨセフの正しさは、世間一般の「正しさ」を道具にして人を論難し、自分の勝利に酔いしれるという種類の「正しさ」ではなかった。むしろ彼はマリヤへの「愛」と神の律法に対する誠実さ(＝正しさ)の故に、律法を守りつつ彼女の名

誉を守る道を模索し、ひそやかな離縁をする事を考えたのである。しかし聖書は彼はなお「考えていた(二〇節)」と言う。そう彼の「正しさ」とは悩みを産む「正しさ」だったのである。

二、固着しない「正しさ」

「あれは一体誰の子なのか」「俺はどうすればよいのか」そして仮にマリヤがヨセフに事実を告げたとすれば「おなかの中にいるのは聖霊による神の子というのは本当なのか」「マリヤのことは信じるに足るものなのか」目の前に展開する奇妙な現実を見て義人ヨセフは煩悶した。その時彼の夢枕に天使が現れ、彼に成すべきことを告げる。それはマリヤと結婚し、自分とは関係のない子の父になるという事であった。注意すべきはこれは義人ヨセフがその「正しさ」と「愛」によって考え抜いた結論とは全く異なるものだったということである。ヨセフはどうしただろうか。「いやもう私の心は定まっていますから」と反論しただろうか。否、二四節に「主の使いに命じられたとおりにして」とある通り、彼は己の決断を変えて新しい道に向かったのだ。人間はなかなか自分の決断や判断から抜け出せない生き物だ。「正しい」と思えば特にそうだ。時にはそれが間違っていると解つても「いまさら後戻りなど」とい

って絶望への道を驀進してしまうことさえある。しかしヨセフは違った。正しさの根拠を常に自らの「外」に置いていたヨセフは夢の中で天啓を受けた時、彼は今までの自分の判断をすべて括弧に入れて中断し、神が示した道に向かって歩み出すことが出来たのである。

* * *

「へ争う人は正しさを説く 正しさゆえの争いを説く その正しさは気分がいいか 正しさの勝利が気分いいんじゃないか Nobody is Right(x3) 正しさは Nobody is Right(x3) 道具じゃない」この歌詞がショッキングに聞こえるのはそれが「凶星」だからだ。確かに世間にはこの種の正しさが満ちている。この正しさには人間が普通に持つべき迷いや躊躇いはない。だがこの手の「正しさ」を道具にして得た勝利の代償が高いことに人はいい加減気付くべきだ。翻ってヨセフを見ると、彼は決して正義を自らの感情の慰撫や他者の論断のための「道具」にはしなかった。寧ろ自らが従うべき基準としてそれを常に目の前に置き、悩みつつも従っていった。この姿勢こそ私たちの求める「正しさ」だ。自分の思いに固着するのを止め、神の導きに自らを委ねよう。神の平安はそこにある。